

知識探訪

多民族社会の横顔を読む
協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

めぐり、めぐって……マレー王権の伝統と現代

富沢寿勇 (日本マレーシア学会会長)

現マレーシア国王は今年12月で任期5年の満期を迎える。周知の通り同国王制度は1957年の独立以降に創出されたものである。それは当時のマラヤ連邦を構成したマレー半島11州のうち、伝統的支配者を擁する9州の統治者たちの互選で国王が選出され、しかも5年の任期が定められているという、世界でも稀有な制度である。この国王を選挙で選出する制度は、ヌグリスンビラン州の伝統的な王を地方首長たちが合議で選出する仕組みから、また、国王が輪番制(ローテーション)で交替する仕組みは、ペラ州のスルタンを同王家の複数の分岐間の交替で出す制度から、それぞれ着想されたものといわれる。

特に被治者層の合議というボトムアップで王が選出されるヌグリスンビランは、民主社会における王制の伝統モデルとして近代的評価を得たが、それは統治者が他州ではスルタンなどの称号で呼ばれたのと異なり、ヤンディプルトゥアン・ブサール(「統治者となされし者」)の称号で言及されてきた事実にも反映している。

国王制度創出の際にもこれをそのまま国王の称号に採用しようという議論もあり、最終的にヤンディプルトゥアン・アゴンという称号で落ち着いたが、発想の源はやはりヌグリスンビランにあった。また初代国王にヌグリスンビラン王が就任したこともあり、同州の王のかぶり物の様式「デンダム・タツ・スダー(果てしなきあこがれ)」が、その後の歴代国王のかぶりもの(テンコロック)として定着することになった。ちなみにこの様式は同州のムハンマド王(在位1888~1933)の時代に創出されたものである。その王子で初代国王となったアブドゥルラーマンの肖像はマレーシア紙幣に一律に印刷されており、国王と国家を代表するシンボルとなった。

ヌグリスンビラン王が初代マレーシア国王になったのは歴史的偶然も作用した。国王選出に際しては各州統治者の就任年次に従って国王候補の順位リストが作られ、筆頭候補が互選投票で過半数の承認を得れば決まるといった仕組みである。初代国王選出では、第一候補ジョホールのスルタンが高齢と健康上の理由で辞退し、第二候補パハンのスルタンも辞退したため、最終的にヌグリスンビラン出身の初代国王選出に至ったというのが真相のようである。

初代国王はこのようにやや不安定な選出となったが、その後、第9代国王(在位1989~1994、ペラ州)で9州

の各統治者の国王就任が一巡し、第10代国王(在位1994~1999、ヌグリスンビラン州)から二巡目に入ったが、現在の第14代国王まで、奇しくも一巡目と同じ順序で、結果として規則的に国王が交替している。

国王制度は上述の通り近年の創出だが、毎回の国王即位式の報道ではマレー王権の伝統慣習を踏襲していることが強調される。しかし、よく見ると同儀礼も微妙に変化している。即位式の中心的役割を果たすダトゥ・パドゥカ・マハラジャレラの儀礼所作は、第9代国王までは、臣下が王の前で両手を合わせる合掌の宮廷伝統を反復していたが、第10代国王以降は、宮廷の儀礼言語は維持しつつも合掌の所作は廃止され、会釈のみの簡略な形式になった。これは1990~93年前後に展開した国王・スルタンの権限縮小を求める連邦政府の姿勢が儀礼上の変化に反映した部分が大いといえる。この変化はまさに一巡目と二巡目の歴史的区切りに対応して起きている。

クダ州出身で88歳の現国王は第5代(1970~1975)と第14代(2011~現在)の二度にわたり国王を務めた史上初の事例として当初から話題になった。同一人物であるがゆえに、自らが輪番制の原則を国民にわかりやすく具現することにもなった。また一昨年には歴代国王の国家への貢献に敬意を表し、クアラルンプールの9つの主要道路名が、現国王の初回の国王就任以降に満期を務めた歴代国王の名前に改称され物議を醸したのも印象的であった。9という数字が常に不思議な力をもって人々を動かしているかのようでもある。

< 筆者紹介 >

東京大学大学院社会学研究科修了。博士(学術)。東京大学助手、静岡県立大学国際関係学部助教授を経て、現在同教授、学部長、グローバル地域センター副センター長を兼務。専門は文化人類学。主著にマレー王権を論じた『王権儀礼と国家』(東京大学出版会)など。最近はグローバル化のなかでのマレー概念の変容や王権の位置づけを追究し、また、ハラール産業のグローバル展開の比較分析を通じて、その可能性と意味を研究している。